

2019年度海外日本語教育実習報告

—浙江工商大学での気づきと成長—

松本 匡史・川亦 和也

【キーワード】

中国、杭州、浙江工商大学、海外教育実習、実習報告、日本語教育

【要旨】

本稿は、2019年12月に浙江工商大学で行われた海外教育実習の実習報告である。約1週間の実習報告に加え、中国での様々な気づきを振り返る。今回の海外実習では様々な経験をする事ができ、現地で体験するという事の大切さを感じることができた。

1. はじめに

本稿は、2019年12月2日から12月6日にかけて、浙江工商大学で実施された海外日本語教育実習の実習報告である。本実習は、埼玉大学の学部生と大学院生の計2名が、中華人民共和国の浙江省杭州市にある浙江工商大学（以下ZJSU¹）にて行なったものである。

本稿では日本語教育実習の報告に加え、私たちがこの実習で気づいた日本語教育以外のことについても述べていく。筆者²は、海外実習や海外での生活の経験は、日本語教師としての成長はもちろんであるが、人間として成長できる素晴らしいものだと感じている。日本語教師に必要なものは、日本語や日本語教育に関わる知識などはもちろんだが、それに加え、人としての魅力、コミュニケーション能力、異文化適応能力など様々なものが必要であると考えます。

平畑（2010）は、海外での日本語教師経験のある172名の日本人日本語教師に対して、活動に必要と思われる資質の調査を行った。質問紙調査の結果、望まれる資質として6つ



浙江工商大学

¹ Zhejiang Gongshang University（浙江工商大学）、以下ZJSUと略して表記する。

² ここでいう筆者とは、執筆者の一人である松本匡史のことである。3節以外は松本が記述しており、そこに書かれていることは松本の主観である。

の因子を抽出した。その6つとは、「意欲」「人間性」「教育能力」「コーディネート能力」「国際感覚」「日本人性」である。この6つの因子には複数の下位項目があり、「意欲」には「前向きさ」など、「人間性」には「誠実さ」「現地の文化・価値観の理解と受容」「コミュニケーション力」など、「国際感覚」には「生活適応能力」「相互交流・相互理解への配慮」などが含まれている。もちろん日本語教師特有の教授法などのスキルも必要なのだが、それ以外の人としての能力も重要だということが明らかにされた。平畑（2010）では海外で活動する日本語教師に必要な資質について述べられているが、これらの資質は日本国内の日本語教師においても求められる資質であろう。さらに、グローバル化が進んだ現代では、日本語教師特有のスキル以外のものは、一般的な社会人にも求められる資質だと考えても良いだろう。つまり、海外での経験は、日本語教師はもとより、一般的な社会人にも必要とされる人としての能力の涵養に寄与すると思われる。

そのため、本稿では実習報告に加え、中国で気づいた様々なことを振り返る。それが人としての成長につながる過程であると考えられる。

2. 実習報告

2-1 実習概要

本実習では、12月1日と7日を移動日とし、実質的な実習は2日から6日までである。表1に本実習の日程を掲載する。「」は授業名、（ ）は学年を表している。表1を見てわかる通り、基本的には午前中は同じ授業内容のものを別クラスに対して行なっている。そのため、内容はほぼ同じであるが、学生³が違うため、授業の進め方が異なっている。クラスごとの雰囲気も違うため、雰囲気に合わせた授業の進め方を学ぶことができた。各授業では、ZJSUの日本人日本語教師（以下 NT）または中国人教師（以下 NNT）⁴が主体となって授業を行い、私たちが適宜授業参加を行うという形で進め、授業後は毎日レポート（日報）を記録した。



大学敷地内

1限分の授業時間が違うが、ZJSUでは各時限内の途中休憩の時間が異なっているためであり、実質的な1時限分の授業時間は1時間半である。午前中は1限（8:05～）と2限（9:50～）があり、その後、昼休憩となる。約2時間の昼休憩後、3限目（13:40～）が始まる。

なお、私たちは中国語がほとんどできないため、中国滞在生活をサポートする大学院生2名がチューターとして手助けしてくれた。

³ 本稿では、ZJSUで日本語を学ぶ大学生および大学院生を、学生と表記している。

⁴ 日本人日本語教師を NT (Native teacher)、中国人教師を NNT (Non-native teacher) と表記する。

表 1. ZJSU 日本語教育実習日程表

	午前	午後
12/1 (日)	移動日	
12/2 (月)	8:05~9:35 「古典日本語」(4年生) 9:50~11:25 「古典日本語」(4年生)	13:40~15:20 「日本文学」(3年生)
12/3 (火)	8:05~9:35 「基礎日本語1」(1年生) 9:50~11:25 「基礎日本語1」(1年生)	13:40~15:20 「模擬会議通訳」(大学院生)
12/4 (水)	8:05~9:35 「日本語語音」(1年生) 9:50~11:25 「日本語語音」(1年生)	
12/5 (木)	8:05~9:35 「日本語語音」(1年生) 9:50~11:25 「日本語語音」(1年生)	17:30~18:30 中日学生交流会
12/6 (金)	8:05~9:35 「基礎日本語1」(1年生) 9:50~11:25 「基礎日本語1」(1年生)	
12/7 (土)	移動日	

2-2 授業報告

2-2-1 実習1日目 (12/2)

以下では、日にちごとに実習内容などを振り返る。

実習1日目午前は、NTが担当する4年生の「古典日本語」の授業に参加した。源氏物語や中世和歌の説明や音読などを行っていた。内容自体は、日本の中学校の古典で教わるような内容であった。そのため、外国人にとって内容は簡単ではないのだが、授業は直接法で行われており、学生のレベルの高さに驚かされた。中学生当時、古典はとても難しかったという記憶があるが、日本語で日本の古典を学ぶ中国人学生に衝撃を受けた。筆者は、コスタリカや日本国内で日本語教師経験があるのだが、授業カリキュラムは日本語を教えることだけで余裕がなく、日本語や日本に関わる周辺分野までほとんど手が回らなかった。日本語を使い、日本語以外の授業をすることは、インプットのにもアウトプットのにも有効だと思われる。

午後は、NNT が担当する 3 年生の「日本文学」の授業に参加した。近松門左衛門や松尾芭蕉の作品を中心に紹介を行っていた。作品の内容を中国語で説明したり、芭蕉の俳句の解釈などを、学生と相互交流しながら授業を進めていた。知らない内容も多く、得ることも多かった。

ZJSU では、日本の大学院進学や日本近代以前の文献研究を目指す学生もおり、古典日本語学習の需要があるということも関係しており、これらの授業は ZJSU の特徴的な点でもある。そのような授業に参加できたことは意義深いものであった。

2-2-2 実習 2 日目 (12/3)

実習 2 日目午前は、NNT が担当する 1 年生の「基礎日本語 1」の授業に参加した。使用教材は『日語総合教程』であった。1 限の授業は 8 時 5 分からのため、私たちはその 10 分くらい前には教室に着いたのだが、すでに学生が着席しており、音読などの自主勉強を皆がしていたことに驚いた。今回の実習では 1 年生は 2 クラスで、両クラスとも学生数は 40 人程であるのだが、ほぼ全員が朝早めに来て自主勉強をしていた。日本の大学では見られない光景に、文化の違いを感じた。



ロールプレイをする学生

授業の初め、まずはロールプレイを自ら考え、習った文型などを使っての発表を 2 組行なった。ZJSU の 1 年生クラスは 40 人ほどもいるため、なかなか全員がアウトプットすることが難しいが、なんとか学生に発話させようとの意図を感じた。

NNT の初級クラスでは主に、中国語を使った明示的な文法説明が行われていた。いわゆる講義型の授業であるが、NNT の話し方が上手く、学生の笑いが多くあり、退屈しない授業であった。そして、宿題に暗唱があるのも特徴的なところであった。NNT と NT では授業に対する役割が分かれており、NNT は中国語による明示的なインプット、NT は直接法によるインプットとアウトプットを行なっているようであった。

久保田 (2009) は、各国の NNT のビリーフ (言語観・学習観・教授観) の違いに注目し調査を行なっている。その結果、「ベトナム、中国は、米国に比べて「文法・暗記・訳読型」の傾向が強いことから、「正確さ志向」⁵の傾向も、ベトナム、中国の方が米国よりも強い」(pp.194-195) と述べている。そして、その「正確さ志向」に影響を与えるものとして NNT には、自らの母語で日本語についての「明示的な知識があるという点でネイティブより優れているという自覚があり、明示的な説明を肯定的にとらえている傾向」

⁵ 「正確さ志向」とは、「言語の構造や発音の面での「正確な」産出を目指し、そのために授業では文法の詳しい知識を与え、練習においても正確さを求め、学習量を重視し、教師自身にもできるだけネイティブに近い「正確さ」を求める」(久保田 2009:189) 志向である。

(p.207) が見られたと報告している。

これは「正確さ志向」や「文法・暗記・訳読型」が良いとか悪いとかの話ではなく、地域によって NNT のビリーフに違いがあるということである。ZJSU では NNT と NT の違いに則した役割があり、それが適切に組み込まれていたことが印象的であった。

午後は、NNT が担当する大学院生の「模擬会議通訳」の授業である。この授業は大学院生の通訳の授業であるが、レベルの高さに唖然とした。内容は同時通訳の練習であった。まず私たちが自己紹介も兼ねて、自由なテーマでの話を行なったのだが、それをいとも簡単に同時通訳を横で練習していた。もちろん事前にテーマの打ち合わせは行なっておらず、授業の始まる 10 分くらい前に内容を考えた。通常、学習者との会話では語彙コントロールをするが、この時はしておらず、スピードも通常の日本語発話で行なった。中国の日本語教育が進んでいるとは知っていたが、同時通訳ができるレベルまでとは予想だにできなかった。

授業後には、実習をコーディネートしてくださった先生に大学内を案内していただいた。そこで印象的だったのが、図書館での勉強風景だ。大学院の入試が近いということで、大勢の大学生が自主勉強をしていた。自習室内は満席になっており、みな黙々と勉強していた。さらに、廊下では多くの大学生が歩きながらそして座りながら、ぶつぶつと何かを呟いて暗唱をしていた。ここでは、日本語以外の科目でも暗唱が大切なようだ。



図書館内の廊下で勉強する学生

2-2-3 実習3日目 (12/4)

実習3日目午前は、NT が担当する1年生の「日本語語音」の授業に参加した。内容は、会話と聞き取りを合わせたようなものである。1年生だが、NT による直接法での日本語インプットとアウトプットをメインとしている。

やはり、1年生なので日本語の産出はまだだである。しかし、聞き取り練習問題中に机間巡視をしていたが聞き取りはよくできていた。1年生から、生の日本語に慣れさせることを目的としているようだ。

午後は授業がなかったため、学生とともに市内を見て回った。私たちは中国語が話せないの、この時も学生はすべて日本語でいろいろな説明をしてくれた。このような生きた



机間巡視

日本語アウトプットができることは、学生にとっては良い練習になったであろう。中国人と日本人の異文化交流という意味でも、海外で実習するということは、日本語学習者にとって良い影響を与えるものであると感じた。

2-2-4 実習 4 日目 (12/5)

実習 4 日目も、NT が当する 1 年生の「日本語語音」の授業に参加した。内容は前日と同じで、会話や聞き取りなどである。私たちは適宜、授業補助を行っていたのだが、何回か学生からの質問にうまく答えることができず歯痒い思いをした。それは、ほとんどが言語の問題であった。私たちは中国語での質問が理解できず、学生も日本語での質問ができない。海外の日本語教育現場では、NT には多少の語学力と、学生には日本語での質問方法というストラテジーが必要なのだろうと感じた。

この日も午後は授業がなかったが、「中日学生交流会」というイベントが催された。この交流会には、日本語専攻の多くの学生と ZJSU に交換留学などで来ている数名の日本人留学生が参加した。日本人交換留学生は中国語が話せるようで、中国語で会話をしていた。私たちは日本語だけであったが、本実習では授業に参加できなかった ZJSU の 2 年生とも話すことができ、このイベントは私たちにもそうだが、学生にも生の日本語に触れる良い経験になったようだ。



中日学生交流会

2-2-5 実習 5 日目 (12/6)

実習 5 日目は、NNT が担当する 1 年生の「基礎日本語 1」の授業に参加した。使用教材は『日語総合教程』である。これは中国人向けの日本語教材で、1 課で扱う文型が多い。『みんなの日本語』で 3、4 課かかるところを 1 課で終わらすような早いペースで進んでいく。中国の日本語専攻の高等教育機関では、1 年半から 2 年ほど勉強すると、日本語能力試験の N1 に合格できるようになるそうで、非常にペースが速い。そのため、文法説明は時間のかかる NT の直接法ではなく、NNT が中国語で手早く終わらせる。NNT の授業には巧みな話術が必要で、この授業でも手早く説明しつつも、学生の関心を引きつけるような授業が行われていた。

この日が実習最終日であったが、ZJSU では NT には不可能な、NNT の能力を十分に活用した授業が行われているのが印象的であった。授業ペースが速いため、学生は自習が当然必要になってくるのだが、しっかりと自習しているようであった。日本の大学とは多くの面で違うのだが、中国に合った中国の日本語教育を見ることができ、今回の実習はとても良い経験を積むことができた。

2-3 授業以外について

ここでは、授業以外のことについて簡単に述べる。

私たちは実習中、「歌江維嘉大酒店」というホテルに泊まっていた。ここは ZJSU の近くにあるホテルで、授業が行われていた教室まで歩いて 10 分ほどのところにあり便利であった。部屋は 2 人部屋であったが、快適で何も苦労はなかった。ただ、英語があまり通じなかったので、ホテルの人と話すときは注意が必要であった。私たちは携帯の翻訳機能を使い、用を済ませていた。そして、ここのホテルや大学内でもそうだが、中国では wifi 環境があまり良くないため、インターネット使用は日本と同じように考えてはいけない。

お金事情も日本とは違い、中国では今はほとんど電子マネーである。現金お断りの店も多く、注意が必要である。大学の学生食堂でも同じで現金は使用できない。そのため毎回昼食はチューターに払ってもらい、最終日にまとめて現金を手渡すという方法をとった。電子マネーが普及しているのは確かに便利なのだが、中国の携帯電話



学生食堂

を持たない外国人には不便であった。一度、チューターがいない時に、大学敷地内のファミリーマートでペットボトル 1 本を買おうとしたのだが、店員に「No cash」と言われて困った。実はこの店では前日、食料品などを現金で買ったので、現金が使えると考えていたのだが、どうもこの日は何らかの事情で現金お断りになったようだった。チューターもおらず、携帯電話の電子マネーがないため、大きいお金しか持っていない筆者は買うのを諦めようとしたのだが、その時、見ず知らずの中国人女子大学生が英語で声をかけてくれた。彼女は「私が払ってあげるよ」と言って、自分の携帯でサッと払ってくれた。彼女は「大丈夫、大丈夫」と言っていたが、感謝の気持ちとして日本円で 100 円を彼女に渡した。

突然のことで、助けてくれた彼女に十分な礼ができなかったことが心残りだが、中国人の優しさに触れることができた心温まる経験だった。日中両国間は、その国の人に対する良いニュースも悪いニュースも報道され、それによって偏見も生まれている。だがそれは、やはり無知からなる偏見で、実際に現地で体験しなければ、本当の中国人も日本人も理解できないだろう。今回の海外実習では、このような体験も含め、現地で体験するということの大切さを感じることができた。

次節は埼玉大学学部生の実習報告である。

3. 浙江工商大学での実習を通して

今回 7 日間の実習を通して、非常に多くの刺激を受け、有意義な時間を過ごすことができた。海外の大学での授業観察を通して学んだことも多くあったが、チューターの方々

や現地の学生と交流する中で感じたことも貴重な経験となった。大学での気づきと異文化交流の大きく二つに分けて述べていこうと思う。

ZJSUでの日本語教育プログラムでは、日本人講師によるネイティブの講義と、中国人講師によるノンネイティブの講義両方に参加した。主に大学1年生を対象とした日本語の講義に参加したのだが、学習期間3ヶ月とは思えないほど授業のスピードがとても早く、一度に多くの文法項目を扱うため、予習をしていないとついていけない授業であると感じた。だが、ほとんどの学生が真面目に予習をしてきていて、日本の大学とはかなり違う雰囲気であった。日本の大学での言語教育は、高校までの言語教育とは大きく異なる印象を持っているが、中国では、高校の延長線上のような言語教育が行われている。学部の色も影響しているかもしれないが、いい意味での詰め込み教育を行っている感じがした。学生の大半が日本への留学を目指していることもあり、授業への積極性や、日本語を習得しようとする意欲が感じられ、海外の日本語教育現場の実際の雰囲気を肌で感じることができた。その中でも、大学院生対象の授業である、「模擬会議通訳」は衝撃的な印象を受けた。なぜなら、現地の大学院生がその場で読まれたテキストを同時通訳するというものであり、海外のトップレベルとも言える日本語教育現場に参加することが出来たからである。なかには、違う大学から編入したという院生もいて、それでも流暢な日本語で通訳をしているのを聞き、レベルの高さに感動を覚えた。筆者は日本語教育に出会ったのが最近であるので、海外での日本語教育も、国内の日本語教育もどのように行われているのかあまりよくわからないのだが、それでも今回の実習先は教育レベルが高いと感じられる大学であり、レベルの高い教育や参考となる授業風景を見ることができた。



「模擬会議通訳」で通訳する学生

今回の実習では、現地の学生と交流する機会が非常に多く設けられ、その中で感じたことも多くあった。なかでも強く感じたことは、日本語教師はこの先日本語を教えるだけでなく、日本語の知識だけでなく日本のアニメについての知識もある程度は必要であるということだ。近年、日本のアニメや漫画文化が海外に浸透してきているということは周知の事実であるが、しかし今回の海外実習で現地の学生と交流していくうちに、自身の思い描いていたアニメの浸透を遙かに上回る日本語教育上のアニメの影響があるということがわかった。筆者が交流した学生の大半は、アニメをきっかけに日本語を勉強していたのである。筆者はアニメの知識があまりなく、国民的アニメと呼ばれる「サザエさん」程度のアニメの知識しか持っていないので、現地の学生との会話がさっぱりわからないということも多くあった。このような体験から、今後学習者と教師のコミュニケーションを円滑にするための鍵は、「アニメ」となるのではないかと感じ、言語と文化の結びつきは大きく、言語教育には文化教育がつきものであるということに改めて理解で

きた。

以上のように、教育現場から学んだことはもちろん、それ以外の活動を通して発見した日本語教育に影響を与えるものや、日本との文化的差異は日本では感じることでできない貴重な経験となった。この実習期間が充実したものとなったのは、サポートをしてくださった先生方をはじめ、チューターの方々、そして交流をしてくださった現地の学生がいてくださったおかげである。この海外研修を支援してくださった方々に深く感謝いたします。7日間本当にありがとうございました。

4. おわりに

本稿では、中国で実施された海外日本語教育実習の報告を行なった。本実習期間中、大きな問題もなく、快適に過ごすことができた。これも ZJSU の先生方とチューター、そして学生の手助けがあったからである。先生方には、授業のアドバイスなどをしていただき、中国の日本語教育に対する理解を深めることができた。それに加え、私たちのための歓送迎会を開催していただき、心からの感謝を申し上げる。そして、1週間一緒に行動を



学生による市内案内

共にし、多くのサポートをしていただいた2人のチューターに対しても感謝している。中国語がまるで話せない私たちがストレスなく中国実習を終われたのは、この2人のサポートが大きかったのは言うまでもない。

今回の実習で多くの貴重な体験をすることができた。「百聞は一見に如かず」という諺があるが、まさにその通りで、様々な気づきと学びがあった。

佐久間 (2013) は、いわゆる“グローバル人材”に必要なこととして海外での様々な体験の必要性を説いている。「現地の人々と一緒に悩み、現地の人々に教えられたり助けられたりして、やがてその問題を乗り越えていく。若者が“グローバル人材”と呼びうる人材になっていく道筋は、もちろん多様である。(中略) 国・地域に暮らし、現地のことばを使って現地の人々と喜怒哀楽を共にし、多種多様な問題に向き合い、悩み苦しみ、それぞれの方法で、少しずつ成長していく」(pp.182-181) と述べているように、現地での生活と、その苦しみや喜びなどを体験することによって人は成長していくのである。

この海外実習プログラムは約1週間と短いが、来年以降も多くの埼玉大学生が参加し、その経験が人としての成長に繋がることを願う。

謝辞

本プログラムの実施に際して、学長裁量経費（学生支援経費）による助成を受けました。また、埼玉大学教養学部よりご支援を頂きました。ここに記して感謝を申し上げます。

す。

そして、私たちを快く受け入れてくださった浙江工商大学東方語言文化学院（東方語言・哲学学院、2020年1月2日改称）に対しても謝意を申し上げます。それに加え、実習中に多大なるご支援をいただいた浙江工商大学の呉玲先生、呉毓華先生、丁之群先生、そして様々なご配慮をしてくださった岡田重美先生に対しても深い感謝を申し上げます。埼玉大学の劉志偉先生には、引率や実習全般に御尽力してくださいましたこと、この場を借りてお礼申し上げます。

最後に、中国生活全般をサポートしてくださったチューターの沈曉雪さん、程希さん、ありがとうございました。

参考文献

- 久保田美子（2009）「ノンネイティブ日本語教師のビリーフの要因—インタビュー調査から共通要因を探る—」『日本語教育をめぐる研究と実践』水谷信子（監修）・桜井隆（編），凡人社，pp.185-210.
- 佐久間勝彦（2013）「青年海外協力隊事業再考—“グローバル人材”育成の観点から—」『聖心女子大学論叢』121，pp.194-166.
- 平畑奈美（2010）「海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質の構造化—海外教育経験を持つ日本人日本語教師への質問紙調査から—」『早稲田日本語教育学』（5-7），pp.15-29.

松本匡史（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）
川亦和也（埼玉大学教養学部生）